

保育内容の指導法に関する一考察 ～自然とかかわる保育環境を通して～

Considering How to Teach the Substance of Child-care : Through the Child-care Environment that can be Related by the Feeling of a Natural Material and Nature

石 倉 卓 子

ISHIKURA Takako

はじめに

幼児の生活はあらゆる環境からの刺激と密接につながっている。その環境の一つに、自然環境が挙げられる。幼稚園教育要領では「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう、工夫すること」⁽¹⁾とあり、幼児が身近に自然を体験する機会や環境を整える保育者の役割についての重要性が述べられている。また、かこさとし氏が「石けり」の遊びにおいて、「遊ぶさいに、その大地の土や泥や砂や粘土、小石や砂利の様相の差異、色の変化、しめり気、高低、ときには雑草やアリがいることを知る」「子ども達は遊びを通して、人間のいとなむ生活や社会が入りくんで複雑で変化があり、それに対応していくのが人間であり、そうした試みに挑戦し、失敗し、工夫し、成功し、そして満足をするができる」と語っている⁽²⁾ことに象徴されるように、自然の中で遊ぶことは、子どもにとっての様々な学びの機会となっ

ていることが予想される。

しかし、社会全体の自然環境について現状をみてみると、近年、今まで私たちの身近な存在であったメダカやキキョウなどが絶滅危惧種となっている、という報告があった。また、酸性雨や光化学オキシダントなどの影響で、子どもたちが安心して戸外で遊べない状況もでてきている。このような状況も含めて、地球規模で進む温暖化等による環境破壊により、失われた自然環境を積極的に再生・修復するための自然再生推進法が平成15年に施行されている。これらの背景から、環境省でも地域における水環境に親しむ基盤作りを推進するなど、子どもが自然に親しめる環境づくりを行っている現状がある⁽³⁾。

では、家庭に目を向けてみるとどうであろうか。玩具の氾濫、遊び場の不足などで、都市部を中心に子どもたちはどんどん室内カプセルに追いやられている感がある。戸外で思い切り遊んでいる子どもの姿や、直接自然と触れ合う機会が少なくなっている。仙田満氏は、「あそび場づくり」「あそび時間の増大」があそび環境の再生の基本、と二十数年も前に語っている⁽⁴⁾が、今現在の課題でもある。場づくり、時間づ

くりについての検討は、大人のかかわりや行政の分野も含めて考えていく必要があるだろう。

このように環境の大きな変化や国レベルの対策をとらえつつ、比較的 naturally 恵まれているといわれる富山で、保育所（園）や幼稚園の自然遊びにおける環境をみると、ほとんど全ての保育所（園）・幼稚園に砂場が設置されていること、地面や雑草、花壇もあり、ブランコや滑り台、雲梯など、間接的に自然と触れられる物的環境が整っていること、半数の保育者が自然材を積極的に保育に取り入れていることなどが要因にあげられる⁶⁾。環境を通した指導がうたわれている保育現場ではあたりまえのこのようではあるが、保育所（園）や幼稚園は社会全体のなかで、子どもの育ちを支える自然環境がある程度整っているということになる。しかしながら、それらの自然が子どもたちの日常生活に受け入れられ、育ちに活かされているかについては、検討の余地があるとともに、さらなる可能性を秘めているとも考えられる。

本論では、幼稚園における事例から自然とかわる幼児の実態を探るとともに、自然材そのものが幼児にどのような影響を与えるのか、という両側面から幼児を育む環境について考えていきたい。

I 自然とかわる幼児の姿

幼児が自然に触れている場面をとらえると、保育所（園）や幼稚園において、遊びの場面や散歩・遠足などの園外保育についてみられることが過去の経験からも明らかである。言うまでもなく、子どもは「環境の特性を受け止めながら」⁶⁾遊び、「素材・教材・遊具・道具・空間・時間など、子どもを取り巻くさまざまな環境」は子どもに働きかける。そして「子どもはこの働きかけを受け止めたり、受け止めなかった

り」して遊ぶ。したがって、「これらが潜在的に保有している可能性（潜在的な学びの価値）を知り、理解することは子ども理解を助ける」ことになる⁷⁾。幼児期には自然や人々など身近な環境にかかわる中で、自分の感情や体験を自分なりに表現する充実感を味わい、豊かな感性や自己を表現する意欲が育てられる、とあるが、ここでは自然とかわる遊びについての事例を自然材別に挙げ、幼児がどのようなことに興味を持ち、何を感じているのかを考察する。また、それは自然材のどのような性質が影響を与えているのか、周囲の環境についても合わせて考察する。なお、ここで言う自然材とは、水、砂や土、草花や木、風、太陽の光、石、雪や氷など、幼児の遊び場面に見られる自然の材とする。

ここで、自然材を通した遊びの事例を紹介する。以下の事例は、著者が2005年まで在籍していた幼稚園で半参与観察を行った際の記録をもとにしたものである⁸⁾。

1 水の遊び [年中児]

雨の中、男児が、鉄棒にぶら下がっている雨粒を指で触っている。水滴の先端にそっと触ると指にくっついて、スーッと指を伝って流れた。男児はこの遊びを繰り返した。

<考察>

男児は、水滴の形や大きさ、透明感などに興味を持ったと思われる。もしくは、いつもは空から降ってくる雨が、鉄棒にぶらさがっていることへの視覚的な驚きや発見が幼児の「指で触る」という行為につながったのではないだろうか。また、この行為を繰り返していることから、水滴を触ることで水が指を伝って流れる感触にも興味を示していることが予想される。

水が鉄棒に水滴となってぶら下がるのは、表面張力が主に関係していると思われる。また、

地面と平行に立つ鉄棒と重力の関係がぶら下が
る水滴を作る環境になっている。

2 泥粘土の遊び [年長児]

男児が泥粘土の山のくぼみに水を入れて遊
ぶ。どんどんやわらかくなる。表面がとろとろ
になってきた。全身でその感触を味わう。する
と男児は、手や足のかかとでぐっと押したり水
と混ぜたりしながら泥粘土山をこね始め、固い
部分もとろとろにしていった。

<考察>

男児は始め、水を溜めることに興味を持って
いたようだが、その中で遊んでいるうちに泥粘
土が柔らかくなっていく変化を体感し、その感
触の柔らかさに魅力を感じたようである。水を
かけて力を加えると泥粘土が柔らかくなるとい
う関係に気付き、その行為を繰り返している
と思われる。

粘土の粒子は細かいだけではなく、整った結
晶構造を持っている。粘土をこねたり練ったり
することでなじんでくるのは、土の中の空気が
抜け、粘土の粒子同士が近づいて、結合しやす
くなるためであると言われる。水を加えること
でさらにその作用は助長される。また、大量の
泥粘土が幼児の身体全体の動きを誘発している
と考えられる。

3 草花の遊び [年長児]

ある日、保育者がアップルミントの葉を指で
擦り、女児らと匂いを嗅いだ。数日後、女児ら
は、園庭に生えているアップルミントやキンモ
クセイの花を水と一緒にフィルムキャップに入れ、「ほら、香水。いい匂いでしょ」と言って
保育者の鼻の先に差し出した。

<考察>

女児らは、アップルミントの香りを意識した
経験からキンモクセイの花の香りにも意識を向
け、遊びを展開していったと思われる。キンモ

クセイの花は薄橙色で小さく、甘い香りがする
ため、女児にとっては思わず集めたくなるよう
な材だったのではないだろうか。香りから香水
を連想したと考えられる。

ハーブは香りの強い植物である。また、花の
香りの成分は主に花びらに多く含まれている芳
香油がもととなっている。ある期間につくられ
て、必要な時に酵素の働きで分解され、空気中
に発散するため、香りのする時期を利用して遊
びが展開できる。キンモクセイの花が手に届く
位置に咲いていたことも、遊びにつながった要
因であろう。

4 石の遊び [年長児]

女児らが、コンクリートテラスの上でバーベ
キューごっこをしている。「土はご飯、草は野
菜、石は肉」と言いながら小さな石ころを、草
や土の中にいくつか入れて金属のフライ返しで
混ぜている。その度に「シャカッシャカッ」と
小気味よい音がする。女児らはテラスを指差
し、「これ、鉄板なの」と言う。

<考察>

女児らはバーベキューごっこというイメージ
に浸る楽しさや、仲間と一緒に料理を作る楽し
さを味わっているようだった。草や土、石など
の自然材はバーベキューの食材として見立てや
すいものだったとも考えられる。見立てのしや
すさがイメージの世界を支えているとも考えら
れる。

石の形や大きさ、模様や色、硬さが「肉」と
いう見立てを生んでいると考える。石の模様は
含まれている鉱物の種類や石の作られ方に影響
を受けている。また、草や土との関係で石の食
材としての見立てが決まっていた感もある。
さらに、コンクリートテラスは平らで固く、金
属のフライ返しを使うと鉄板が擦れるような音
がすることから、実生活に近い経験が味わえ

る、場という環境も遊びにとって重要であることがわかる。

5 風の遊び [年長児]

女児らが手作りの巨大こいのぼりを持って走っている。ポリロールで作ったこいのぼりは、幼児が走ると空気が口から入って地面から浮く。女児がより速く走るとこいのぼりのしっぽが地面につかなくなった。

<考察>

走るとこいのぼりが泳いでいるように見えることで、もっと泳がせたい、より速く走ろうという思いが強くなったのではないだろうか。自分の動き次第でなびく様子に変化することも行動を誘発する要因ではないだろうか。幼児自身も、顔などに受ける風の強さの違いや風を受けたこいのぼりの重さを、走る速さによって感じていると思われる。

走ることで風が生まれ、速く走るほど尾っぽの位置が地上から高くなり、大きく揺れる。風の強さは、風の力と速さで決まるため、速さが増すほどこいのぼりに影響を与える風の強さが大きくなり、ポリロールの動きを誘発するのではないかと思われる。また、素材が薄くて軽いこと、風が触れる表面積が大きいことも関係していると考えられる。さらに、思い切り走ることができる空間であったこともこの遊びが生まれた要因であろう。

6 太陽の光の遊び [年中児]

池の底にアメンボの足の丸い影が映っている。アメンボが動く度にその六つの影も動く。幼児はアメンボを見たり、影を見たりして「丸いの動いてる」と言いながら、その後もじっと見つめていた。

<考察>

幼児は、影が動くことで池の中に何かいるのかと思ったのかもしれない。しかし、しばらくすると、影が動くとき、アメンボも動いていることに気付いているようであった。その視覚的な不思議さが心をとらえ、見続けることにつながったのではないだろうか。

アメンボの足は水をはじくため、足でおさえた窪みで影ができ、そこに太陽光が当たって水底に影が映る。池の深さが30cmほどあるため、何の影なのかすぐにわからないところに、「どうしてだろう」「何だろう」という好奇心を呼び起こす要因があったと思われる。

7 雪の遊び [年長児]

男児が、溶け始めている雪を同型の2つのプリンカップにそれぞれ入れて、口同士を合わせた。すると、雪同士がくっつき、男児はそれをそっと持ち上げた。

<考察>

幼児は雪の遊びを繰り返す中で、カップに入れた雪同士がくっつくことを発見した。「こうしたらどうなるかな」という好奇心がこの遊びにつながっていると思われる。そっと手で持ち上げることで、雪のくっつき具合を手で感じ取っていると思われる。

雪や氷が互いにくっつくのは、“焼結”と言われる。融解点に近いと物質の分子構造が不安定になり、くっつく。また、雪結晶の表面を覆った薄い水膜の表面張力の働きで、雪粒同士がくっつきやすくなる。この遊びでは、このような雪の性質が作用したと考えられる。

このように、幼児が興味を持った自然材は、五感を刺激するものであることがわかる。

その他様々な事例の考察の結果から、自然材のどのような性質が幼児の興味を惹き付け、遊びを生み出したのかを幼児の視点から以下に整理した⁹⁾。

＜子どもを惹き付けた自然材の性質＞

1 水の遊びから	的に投げる・当てる・つけることができる土
地面の色が変わる水	団子、飛び散る砂団子
まっすぐ細く縦に流れる水	指で描ける泥粘土の液
ぶら下がっている水滴	様々な色の絵の具が作ることができる土
葉が浮く・水位が上がる・溢れる水	踏むと感触のいい瓦粘土
葉を混ぜることができる水	足指の跡が付く瓦粘土
砂場にたまる水	ねじることができる瓦粘土
飛沫が上がる水	指で挟める瓦粘土
どこまでも流れる水	形を作ることができる瓦粘土
傾斜を大きくすると速く流れる水	水を付けて描ける黒土の塊
勢いをつけることができる水	車輪の役割をする砂
2 砂や土の遊びから	ちぎったりつなげたりできる瓦粘土
削ることのできる地面	くっつけることができる瓦粘土
何度も形を作ることができる砂	落として形が作れる瓦粘土
棒でつく感触のいい黒土	つぶせる泥粘土の粒
まるく模様が描ける砂	登ることができる泥粘土の山
川を作れる砂場	小さく丸めることのできる泥粘土
棒を立てることができる砂	雨でどろどろになった地面
型をとることができる赤土	隙間なく詰めることができる赤土
引っ掻くことができる乾燥し固まった赤土	押し込むことができる赤土
水を混ぜてこねると柔らかくなる泥粘土	3 草花や木の遊びから
さらさらの泥粘土の粉	しおり作りの際ブックコートにくっつく葉
水で溶いた赤土	生き物を載せられる広さや硬さのある葉
手指の隙間から落ちる砂土	料理ごっこの材料になる小さくちぎれる葉や 小さな実
砂土を削り集めることができる地面	
木の棒で描くことができる地面	歩ける長い丸太
削ることができる乾燥した泥粘土の塊	乾燥した枯れ葉
字が書ける乾燥した泥粘土の塊	器になる節の途中で切った竹
積む・並べる・つなげられる泥粘土の塊	滑り降りることができる斜めに設置した竹
型を抜ける・形を組み合わせられる瓦粘土	燃えて黒く炭になった木
泥粘土の粉が付く砂団子	紅葉する葉

貼ったりつなげたりぶら下げたりできる、 乾燥した葉・枝・草・木の実	7 雪や氷の遊びから
4 石の遊びから	傾斜のある場所に積もった雪
見立てができる様々な形や色・触感の石	子ども用ナイフで切ることができる雪
投げても転がらない石	枝で切ることができる雪
網にたくさん入れられる小石	削ることができる雪・氷
積んで水の流れを止められる石	型をとることができる雪
5 風の遊びから	跡を付けることができる雪
走ると生まれる風	身体で感触を味わえる雪
こいのぼりがなびく風	固められる雪、水で透き通る雪
レジ袋を引っ張ることができる風	網ですくえる雪
見ることができる風	突き刺す・釣ることができる雪
風車を回すことができる風	くつつく雪
6 太陽の光の遊びから	色が付く雪
色を付けて映せる光	飾りにできる雪
踏める影をつくる光	汚れをとることができる雪
	平たく硬い雪に立てられる氷

水、砂や土、草花や木、風、光、雪は一定の形がなく、常に変化しているということが再確認された。そのため、色や形、触感などが非常に多種多彩であり、自然材それぞれがかかわり合ってさらに多様な環境を生み出している。また、石は自然の中で形状が変化することはあまりないが、水分量で色や触感が変化する。自然は「時間的経過によって変化し、その変化・流転の過程でこれを取り巻く環境にある特有のパターンや構造をつくりだす。このことが自然の運動構造の中に実に多様化した表情や様相をつくりだす要因となる」¹⁰⁾とあるが、表情を豊かに変える自然は、感性を常に刺激するものであると言えよう。

また、セミール・ゼキ氏によれば、人間は自然な色をした自然な物体を見ているとき、抽象的な色彩場面を見たときと同じ脳内部位が活性

化されるだけではなく、さらに他の領野（側頭葉、海馬〔記憶に強く関与している側頭葉の中に埋もれた部位、右半球の下前頭回内に位置する領野〕）も活性化する¹¹⁾としている。この研究結果から、自然の中の自然な色を見ることが脳に大きな影響を与えるととらえることができる。また、リードは「形は、色彩を除外して知覚されることはない」¹²⁾とし、形の認知は色彩の認知に深くかかわると述べている。このことは、自然材のもつ色彩の豊かさ、変化が知覚の働きを活性化させることを物語っており、自然の形や色に触れることは、感性を育むことに深くかかわるのではないかと感じる。

自然材は多種多様な材であるとともに常に変化している材であること、幼児の力で形状や触感を変化させることが可能であること等が子どもの興味を惹き付け、遊びを生み出すことにつ

ながってると考えられる。幼児が何に興味を感じているのかを、幼児の心の動きだけでなく、自然材の性質両面からとらえるように指導することで、幼児に経験させたい内容や、それにつながる物的・心理的な援助をよりの確に考察することができるのではないだろうか。

II 「自然材に触れる」ことと感性

では、幼児が自然材と触れることで、どのように感じ、思い、行動しているのか、また、その際の自然材の性質について考察することで、自然材が幼児の感性を育てている実態がみえてきた。

「感性」は、人々の中により身体化され肉体化されているが故にこれを変えることは難しいとあり、感性の十全な発揮を妨げるものとして、「感性の鈍化をもたらす物質的な窮乏」と「感性の惰性化をもたらす部分化し形式化したものの見方」の二つが挙げられている⁽⁴³⁾。その点、「自然材」には感性の鈍化を防ぐ豊富な「材」が存在し、また、感性の惰性化を防ぐ「変化」があると考えられる。豊富な「材」は感じる機会を保障し、「材」の変化は感じ方の多様性を保障すると思われる。

それでは、幼児の感性について、五感にかかわる感覚の分野はどのように働いているのだろうか。

これまで、保育現場では子どもの感性の育ちを言語化する場合、情熱的、あるいは感覚的な表現の仕方にとどまっていたことが経験的に思い出される。特に第三者への説明は理論的な説得性が要求される場合もある。そこで、自然材に「触れる」ことで実際にどのようなことが起こるのかを、幼児の感性を考える上で理論的にある程度押さえておく必要があると思われる。

感性は「感覚そのものではなく感覚の働かせ

方」、「人間が感覚によって内的・外的な世界をとらえる能力」であることから⁽⁴⁴⁾、感性は育てることのできるものであり、「自分から世界のイメージを作り上げるもの」という教育可能な領域として積極的な意味をもっている。また、中村は「人間的な自然としての感性が人間の文化や社会とともに形成されたものである」と述べており⁽⁴⁵⁾、人間が育ってきた時代という背景も感性に影響していることが考えられるが、本章はこれらのことを踏まえ、感性と深くかかわる感覚について、身体的・物理的な窓口から少し紐解いてみたい。

1 感覚の支え合い

自然に触れる、ということを考えるとき、触覚が働く際に比較的大きなかわりをもつと言われる感覚として、視覚が挙げられる。

中村は「視覚」についてルソーの言葉を引き、視覚は諸感覚の中でももっとも遠くまで及ぶ感覚だが、同時に、もっとも誤りを犯しやすく、もっとも人を欺きやすい、としている。視覚はあまりにも迅速で広範囲にわたるために、他の諸感覚によってこれを訂正することが困難である、という理由からである。このような有能な感覚である視覚の欠点を免れるための方法の一つとして、ルソーはとくに「視覚」と対照的な「触覚」を用いることを挙げている。視覚の性急さを触覚の鈍重ではあるが確実な知識によって抑制するのである、と。触れる遊びは感覚の中でも「視覚」や「触覚」を主に働かせるが、その二つの感覚が相互に支え合うことで確実なリアリティを生じさせることができるのではないだろうか。

2 皮膚が“見る”

神経系の発達の著しい幼児期に、ものに触れ

る豊富な体験を積むことは大変重要であると考
える。

生物物理学者ミカイル・スミアーナフは、
「指に網膜があるのだ」と語っている⁽¹⁶⁾。肘で名
刺を読む、足の指で白黒を区別するという実験
も行っている。物体が何であるかを識別するエ
ネルギー源は、皮膚ということになる⁽¹⁷⁾。皮膚か
ら放出された放射エネルギーが、検体物体に
よって吸収され、次に物体自体がそれぞれの波
長を放出するというわけである。この各光線が
皮膚のいろいろな深さに浸透し吸収されたところ
に熱を生じ、温度の違いや浸透した深さの違い
によって識別するというのである。また、傳
田光洋氏によれば、皮膚はそれ自体が独自に、
感じ、考え、判断し、行動するものとし、脳
のように考える臓器であること、また、脳で学習
や記憶を担っている受容体と同じものが表皮に
も存在し、表皮からの信号が免疫系や中枢神経
系などと密接な関係があることを研究結果から
示している。環境との情報の出入りがある人間
の生命維持には、意識にのぼらない情報の流れ
が必要であり、その流れの維持には体表組織、
すなわち皮膚の健康が重要であるともしてい
る。また、皮膚における情報の流れが全身に大
きな影響を及ぼしていることを予想している⁽¹⁸⁾。
さらに、ミカイルの実験にもあったように、視
覚を失った人でも外部の光に応じて生理的変化
が起きることから、皮膚は光さえも感じて、そ
の情報を内分泌系、神経系に伝えている可能性
があると述べている。

以上のことから「触れること」は、感じるこ
と、考えること、判断すること、行動すること
に大きな影響を与えることがわかる。

3 味と匂いに“触れる”

では、匂いに関する臭覚の部分感性に与え

る影響についてはどうだろうか。

ダウニーは、色味、つまり、味と匂いの感覚
が色感覚を強化し、味と色、匂いと色という共
感覚現象も個々に関与していると報告してい
る。また、デボラは、五種類の色と香水の香り
を関係づけさせた実験で、色と香りの対応のさ
せ方が被験者同士でやや一致することを明らかに
している⁽¹⁹⁾。これは、色から匂いを感じ取って
いること、匂いから色を選び取って表現してい
ることを表している。匂い（香り）は粘膜で感
じることからも、嗅ぐことは、鼻の粘膜で香りに
触れているとも言えるのではないだろうか。

特に乳幼児は、視覚や聴覚よりも、臭覚や皮
膚感覚（触覚）を通して脳の中で大脳辺縁系
（情感を司る）の発達が促される⁽²⁰⁾。大脳辺縁系
の十分な発達がなければ前頭葉（知能）の十分
な発達もありえない。従って、この時期にテレ
ビによる視覚や聴覚の機械的な過度の刺激を与
えることは脳の発達にとって決して好ましいこ
とではない、と言われている。ここでは、臭覚
や皮膚感覚（触覚）が情感に作用することに注
目したい。

以上のことから、風や光や匂いさえも身体全
体で触れているととらえると、触覚体験は幼児
の心身の発達に大きな影響を与えていると言え
よう。「幼児が自ら心身を用いて対象にかか
わっていくことで、対象、対象とのかかわり
方、さらに、対象とかかわる自分自身について
学んでいく」⁽²¹⁾とあるが、様々な触覚体験を経験
できる自然に触れることは、幼児の「感じる
力」「対象をとらえる力」を引き出し、感性を
育み、情感を豊かにする活動であることが考え
られる。

III 自然とかかわる保育環境

本研究では、自然材を使った遊びの場面から

幼児の内面とともに自然材の性質を探ってきたわけだが、子どもがかかわる材、道具や用具、場、時間、人的環境等が保障されている遊びの場面であるからこそ、多様な感じ方を可能にしていると考えられる。時間や空間、使う道具や場所が制限されていけば、幼児自身が自ら環境にかかわっていくことやその子なりの感じ方も制限されるであろう。これらの環境が保障されていることが子どもの感性を豊かに育む要因となっていると思われる。感じる経験を保障された環境は、対象の性質をとらえる力を生み出し、その子なりの感性を育むのではないだろうか。

また、本研究では、自然材という「材」に着目したわけだが、その多様な種類や性質、変化の様子から、感じる経験の可能性をふんだんに内在している材であり、どこから何を感じてもいいように扉が開かれている材ともいえる。感じる要素を常に発信しているとも言えるだろう。その開かれた環境で、幼児が何を体験しているのかをいかにとらえ、さらにどのように幼児へ働きかけていくのか、ここに保育者が援助を考える上で重要な課題がある。

「感じ方の深さはかかわり方の深さ」「自分と自然を切り離さないでとらえようとする感じ方」⁽²⁾、「感じて表す」という連続した営みの過程から形が生まれ、イメージが広がり、行為は繰り返されていくとあるが⁽²³⁾、自然材を感じることで、かかわることが円環的に繰り返され、一体感をもって育っていくところに、その子らしい感性が育まれていくのではないだろうか。

このように考えてくると、「自然を感じることで・かかわることを保障する環境」と、「自然材を使った表現方法を獲得することができる環境」を整えることが必要となるであろう。

さて、幼児教育では、環境を通じた教育が重要視されている。環境とは物的環境（社会環

境、自然環境、施設の設備、教材、素材）、心理的環境（人間関係、雰囲気など）である⁽²⁴⁾。保育所（園）や幼稚園などの庭の環境をみると、砂場や花壇などはほとんどすべてに設置されている。これは、それぞれの自然材を感じやすく、かかわりやすくしてある保育者の工夫と言えよう。このような環境では表出や表現も豊かにみられる。事例のまとめで挙げた子どもを惹きつける自然材の性質をみると、道具や用具、場の環境からも表現が生まれていることがわかる。それらの環境を構成することも、自然材を感じやすく、かかわりやすくする工夫であり、感じる場と時間を意識的に確保する保育者の役割も大きい。その環境の中で子どもたちは、色や形、感触、匂いや音などを感じ、興味をもってかかわり、楽しさを味わっていく。また、これまで自然材に限って論を進めてきたが、虹やオーロラ、蜃気楼や雷、そして四季などの自然現象なども感性の育ちや表現の発想に与える影響が大きいと思われる。これらの現象は、引力や自転、公転などが関わっているものもあり、スケールの点で人間の力では及ばない表現である。このような自然とのかかわりの中で感じる力、イメージの世界をつくる力が蓄えられ、同時にこのようなかかわりを十分保障することが、感性を育む沃野の一部となるのではないだろうか。

これらのことから、幼児の実態や興味等をとらえた上で、自然の中にある様々な要素を意識できるようにすること、また、かかわることができるようにすること、そのような物的・心理的環境を整えることが、前述したような幼児の育ちを支えると共に保育者としての役割となるだろう。そして、そのためには、保育者自身が自然環境との豊かなかかわりを体験する必要があると思うのである。

おわりに

本論では、自然材を通した遊びについて年長児中心に事例を紹介した。今後は年少児、年中児についても自然材とのかかわりについて考察・整理していく必要がある。また、子ども自身の感覚の働かせ方、環境のとらえ方、表し方や、その育ちをとらえていくためには、より細かな継続した観察が必要であり、感性を育む環境構成についても今後具体的に考察していく必要があると感じている。

註

- (1)文部省（1999）：『幼稚園教育要領解説』
- (2)かこさとし（1986）：『日本の子どもの遊び』（上）青木書店、pp.25-26
- (3)18年版環境白書
- (4)仙田満（1984）：『こどものあそび環境』筑摩書房59年、pp.218-231
- (5)2007年8月～10月に行った自然遊びについてのアンケート結果より。対象は県内保育所（園）・幼稚園405ヶ所。回収率75%。
- (6)河邊貴子（2005）：『遊びを中心とした保育』萌文書院、p.31
- (7)同上書、p.33
- (8)富山大学人間発達科学部附属幼稚園（1996～2005）
- (9)2006年7月～11月に観察した事例より。静岡県A保育園、山形県B幼稚園、富山県C美術館、富山県D幼稚園、ドイツE幼稚園
- (10)三井秀樹（2000）：『形の美とは何か』日本放送出版協会、p.158
- (11)セミール・ゼキ（2002）：『脳は美をいかに感じるか』河内十郎監訳、日本経済新聞社、p.381
- (12)ハーバート・リード（2001）：『芸術による教育』宮脇理、岩崎清、直江俊雄訳、フィルムアート社、p.37

- (13)西村拓生/竹井史（1998）：『子どもの表現活動と保育者の役割』明治図書、pp.13-17
- (14)中村雄二郎（1975）：『感性の覚醒』岩波書店、p.277
- (15)デボラ・T・シャープ（1987）：『色彩の力』千々岩英彰/齋藤美穂訳、福村出版、p.134
- (16)同上書、p.140
- (17)傳田光洋（2005）：『皮膚は考える』岩波書店、pp.1-4
- (18)デボラ・T・シャープ（1987）：上掲書、p.140
- (19)増田清和（2004）：『こどもの脳をテレビから守ろう』東成区医師会ホームページ
- (20)文部省（1999）：『幼稚園教育要領解説』環境を通して行う教育の特質、フレーベル館、p.25
- (21)磯部錦司（2007）：『自然・子ども・アートのちとの会話』フレーベル館、p.50
- (22)同上書、p.38
- (23)谷田貝公昭監修 細野一郎編（2005）：『保育内容シリーズ 環境』一藝社、p.9
（平成20年1月11日受付、平成20年2月15日受理）